

【実践報告】

子どもの事故防止と応急処置に関する実践

—— 乳幼児学級の実践報告 ——

Child Injury Prevention and First Aid Skills —— A Report from the Parental Health Education Class ——

安里 葉子

I. はじめに

厚労省の人口動態調査(2018年)によると、子どもの不慮の事故は0歳では死亡原因の3位、1～4歳と5～9歳ではいずれも2位、10～14歳は3位を占めている。筆者が調査した平成14年度では0歳は4位、1歳～19歳は1位を占めていた。いずれも、子どもの不慮の事故は子どもの死亡原因に占める割合は高い。少子化の現在、一人でも多くの子どもが致命的な事故に遭遇することなく健康で健やかに育つための環境を提供することは、社会の責務である。子どもの日常的な事故には、転倒、転落による打撲や出血、重篤な場合は溺れや異物の誤飲による窒息、交通事故などなどがある。特に、子どもの事故は成長・発達にともなう事故の特徴があり(田中2001年, 厚生省1997年, 市川2003年), 事故は軽症から重篤な場合と様々である。山中(2013)は「事故の意味する英語としてaccidentとして使用されていたが、最近ではinjuryが使用されるようになり『事故』は対策を講ずれば『予防することが可能』という考え方が一般となり、推奨されている」と報告している。子どもに安全な環境を提供することや事故に遭遇した場合の適切な応急処置は、応急処置の如何によっては、その後の子どもの成長、発達に影響を及ぼすことに繋がる。養育者が事故をおこしやすい子どもの特徴を理解し、子どもに安全な家庭環境を整備し、事故予防策と事故発生時の適切な応急処置を施すことが求められる。

今回、沖縄県N市の主催する乳幼児学級において「乳幼児期の事故と応急処置」の講習会を実施した。講習会終了後に講習会参加の感想、事故予防に関する行動の変化などについて調査を行った。それらの結果を今後の子どもの事故予防対策の参考資料としてまとめたので報告する。

II. 研究方法

1. 研究目的

沖縄県N市の乳幼児学級「乳幼児期の事故と応急処置」の講習会に参加した保護者を対象とし、講習会参加の感想、「講習会後の子どもの事故発生の有無」「講習会後の事故予防に関する行動の変化」「自宅の間取り図を描いたことで気づいたこと」について調査し、講習会終了後の効果を明らかにすることである。

2. 「乳幼児期の事故と応急処置」講習会の実践内容

- 1) 開催日時: 第1回目は平成14年9月28日,
第2回目は平成14年10月26日
時間: 10～12時。

- 2) 開催場所: 沖縄県N市立公民館

- 3) 講習会内容: 講習会の内容は(1)～(3)について実施した。

- (1) 講習会のゴールを「子どもの事故の現状と事故の起こりやすい要因を知る」、「事故防止の再確認ができる」、「事故発生時の応急処置の方法がわかる」、「心肺蘇生法の必要性がわかる」と設定した。
- (2) 講習会の導入: 講習会開始時に、参加者に白紙(A4用紙)を配布し、以下の①～④の順序で描かせた。①「あなたの自宅の間取り図を描いて下さい」、②「日頃お子さんが過ごしている部屋にお子さんを描いて下さい」、③「お子さんの周囲にあるものを描いて下さい」、④「あなたが危険だと感じているところにマークして下さい」。自宅の状況を描かせた。
- (3) 講義・実技の内容: 講義は①子どもの事故の実態(「子どもの事故の現状」「子どもの死因の順位」「事故発生時刻」「事故発生場所」「事故発生時の保護者の状況」「子どもの特徴」)、②事故の種類、原因と事故予防(「窒息」「溺れ」「転倒、転落」「やけど」「誤飲・異物の混入」「外傷・打撲・骨折」)、

③応急処置の方法（「打撲」「出血」「鼻出血」「骨折」「やけど」「誤飲」「窒息）」を実施した。ビデオ視聴は「赤ちゃん あんぜん大作戦 乳幼児の事故予防のために」（H12年 厚労省監修）、「小さないのち 救うのはあなた」（H13年 厚労省監修）を使用した。実技はビデオ視聴後に乳児モデル人形を使用した背部叩打法を実施した。

3. 調査対象者

沖縄県のN市が主催する乳幼児学級「乳幼児期の事故と応急処置」の講習会（第1回目、第2目）に参加した35世帯の保護者である。

4. 調査方法

1) 調査1：「乳幼児期の事故と応急処置」の講習会参加の感想について調査した。調査方法は第1回目、第2回目のそれぞれ講習会終了直後に、講習会参加の感想を自記式無記名で記述してもらい、その場で回収した。

2) 調査2：「講習会後の子どもの事故発生の有無」、「講習会後の事故予防に関する行動の変化」、「自宅の間取り図を描いたことで気づいたこと」について、自記式無記名質問紙調査法を実施した。調査方法は、平成14年11月16日に心肺蘇生法の講習会（第1回目、第2回目の乳幼児学級参加者の希望により追加で実施した）終了直後に質問紙調査表を配布し、集合調査を行い、その場で回収した。講習会に参加していない世帯には後日、質問紙調査表を郵送し、回収した。一世帯に質問紙調査表は1枚とし35枚配布した。

5. 調査期間：平成14年9月～平成15年3月。

6. 分析方法：数量データは記述統計、記述内容で得られた質的データはカテゴリー化した。

7. 倫理的配慮：質問紙調査は無記名とした。個人を特定しないことと、この結果は講習会の評価と今後の事

故予防に関する資料にすることを目的としていることを明記し、調査協力を得た。質問紙調査の協力は自由意思であり、調査に協力がなくとも不利益のないことを調査表の回収をもって同意を得たものすることを、口頭と文書で説明した。

III. 結果

1. 講習会時の参加者の様子

乳幼児学級「乳幼児期の事故と応急処置」の参加世帯では1回目は20世帯であり、参加者は20名であった。第2回は15世帯であり、参加者は15名であった。参加者の殆どが母親であった（表1）。「乳幼児期の事故と応急処置」の講習会のゴールを4つ設定した。講習会の導入として参加者にA4白紙を配布し「あなたの自宅の間取り図を描いていて下さい」、「日頃お子さんが過している部屋にお子さんを描いて下さい」、「お子さんの周囲にあるものを描いてください」、「あなたが今、危険だと感じているところにマークしてください」以上の4つの内容を記述させ、自宅の生活空間と子どもの居場所、危険と感じている場所を記述させた。図1は実際の記述2例を記載した。危険と感じているところに星印や三角の印の記載があった。また、具体的に危険な内容のコメントの記載もあった。講習会では、参加者が実際に体験した事故事例について発表させ、どのような事故がどのような状

表1 乳幼児学級の実施と参加状況（世帯数、参加者）

実施日	世帯数	参加者	
		(母親)	(不明)
第1回乳幼児学級 H14.9.28	20	16名	4名
第2回乳幼児学級 H14.10.26	15	14名	1名
合計	35	20名	5名

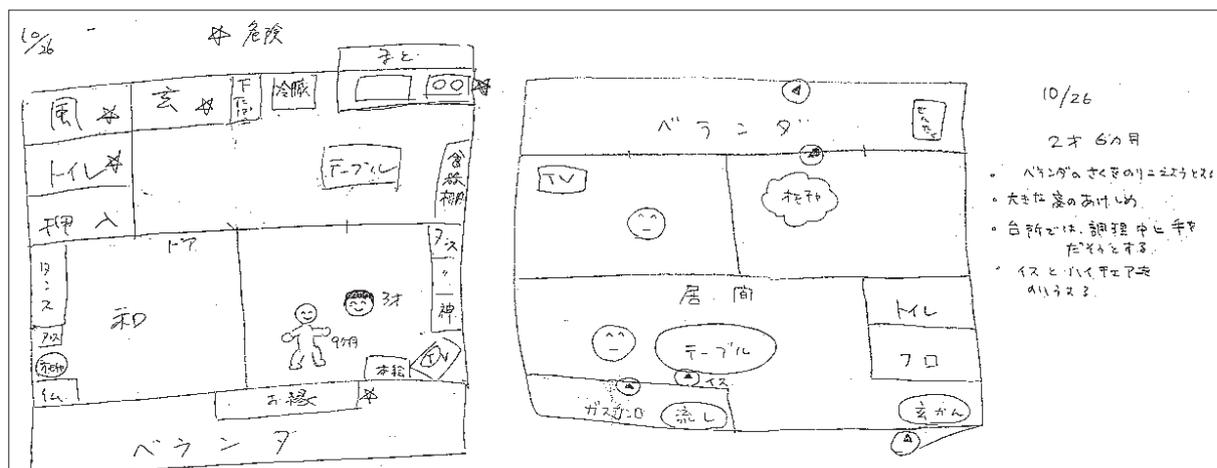


図1 自宅の間取り図

況で発生したのかをお互いに情報を共有した。講義は筆者が作成した資料とパンフレットを使用した。内容は①子どもの事故の実態、②事故の種類、原因と事故予防、③応急処置の方法、心肺蘇生法を説明した。応急処置では子どもの起こりやすい症状を取り上げ、その観察方法と応急処置の方法、病院受診の目安について資料に基づき説明した。参加者の体験談や実際に実践している対処方法についての意見も交えながら進めた。応急処置の方法では、特に子どもの鼻出血ではその対処方法として、出血時に顔を上に向けているという誤った対処方法をしてきた。今回の応急処置の方法で認識を改めたという声が多かった。その後、ビデオを視聴し、実技では乳児モデル人形を使用した窒息時の背部叩打法を実施した。ビデオでの心肺蘇生法の視聴は呼吸停止、心臓停止という重篤な場合の処置方法であり、参加者らは心肺蘇生法に関心を示し、実際に心肺蘇生法の実技講習会を希望した。参加者の希望により後日、心肺蘇生法の実技講習会（平成14年11月26日）を実施した。

2. 調査1：講習会参加の感想（表2）

表2 講習会参加の感想

カテゴリ	コード	n=23 件数
応急処置の方法、ポイントわかった	応急処置の方法、ポイントわかった	8
心肺蘇生法を身につけたい、または体験したい	心肺蘇生法を身につけたいまたは体験したい	5
知識を得た、勉強になった	勉強になった、情報を得ることができた	4
	経験した身近な事故から勉強になった	1
	実際に多くに事故があることが分かった	1
	事故発生や予想など参考になった	1
	家庭で実際に行っている事故予防に、少し神経質と思っていたが講習会で共感することができ安心した	1
	子どもにとって危険物とそうでないものに区別がわかった	1
	心配蘇生法の大切さを実感した	1
	知識があることで、事故を防ぐことの実感と、事故予防の大切さを知った	3
講習会をしてほしい	定期的な講習会や回数を増やしてほしい	3
家の中の危険個所に気づいた	普段見落としがちな家の中の危険なところに気づくきっかけになった、また確認ができた	3
自宅の安全な環境を提供する	部屋をもう一度見直したい	1
	子どもに安全で過ごしやすい環境を提供してきたい	1
	事故に気を付けて育児していきたい	1
	親が事故予防できることはしてあげべきと感じた	1
事故時に慌てず対応したい	事故が起きたとき、あわてないで、対応したい	3
子どもの行動を予測し、見守る	子どもの行動に予測性を持って見守ることが大切	1
子どもに危険を教える	子どもに危険を教える	1
事故へ恐怖心	事故は起きたことを想像するだけで、震える気がする	1

第1回目の参加者の回答は12名、第2回目の回答は11名であり、合計23名（回収率65.0%）であった。23名の記述内容から23のコードが得られ、10のカテゴリが抽出された。講習会終了後の感想では「応急処置の方法、ポイントが分かった」、「心肺蘇生法を身につけたいまたは体験したい」、「講習会をしてほしい」、「家の中の危険な個所に気づいた」、「子どもの行動を予測し、見守る」、「自宅の安全な環境を提供する」などであった。感想での「応急処置の方法、ポイントわかった」や「心肺蘇生法を身につけたいまたは体験したい」と希望している参加者がおり、今回の講習会の評価に繋がった。

3. 調査2：「講習会後の子どもの事故発生の有無」「講習会後の事故予防に関する行動の変化」「自宅の間取り図を描いたことで気づいたこと」について

「心肺蘇生法の実技」の講習会後に質問紙調査表を集合調査で回収した。回答は12名であった。後日、質問紙調査表を郵送し回収した回答は9名であった。一世帯に質問紙調査票1枚とし35枚配布した。回収数は21枚（回収率60.0%）であった。

1) 対象の属性（表3）

対象者21世帯の家族構成はすべて両親と子ども世帯の核家族であった。子どもの数が2人は2世帯のみであり、他19世帯は子どもの数は1人であり、全体の9割は両親と子どもの世帯であった。父親の年齢では20歳代が10人、30歳代は6人、40歳代は2人、50歳代は3人であり、母親の年齢では20歳代が7人、30歳代は12人、40歳代は2人であった。年齢別では父親、母親は何れも20歳代、30歳代が半数以上を占めていた。子どもの性別は男12人、女11人であり、年齢別では1歳未満6人、1～2歳未満14人、2～3歳未満1人、3～4歳未満2人であった。1歳代が半数以上を占めていた。

表3 対象の属性

		n=21			
父 親	20代	30代	40代	50代	
	10	6	2	3	
母 親	20代	30代	40代	50代	
	7	12	2	0	
子どもの年齢	1歳未満	1～2歳未満	2～3歳未満	3～4歳未満	
	6	14	1	2	
子どもの性別	男	女			
	12	11			
家族構成	両親と子ども1人	両親と子ども2人			
	19世帯	2世帯			

2) 自宅の間取りを描くことでの気づきと行動の変化
(表4, 表5, 表6)

自宅の間取り図を描き危険だと感じているところにマークした結果、危険だと気づきのあったと答えた者は17名であり、そのうち事故予防行動ありは15名、事故予防行動無しは1名、不明は1名であった。気づきはなかったと答えた者は4名であり、そのうち事故予防行動ありは3名、不明は1名であった(表4)。15名の気づいたこの内容をみると(表5)、「浴槽の水、洗濯機の水」、「ベランダの柵、クーラーの室外機」、「高く積んである家具や物」、「家の中の段差」、「引き出し」、「カセットデッキやコンセントの穴」、「危険な場所が多い事」、「対策をとっていない」、「今まで気にしなかった所にも目を向にも目を配る」、「子どもと大人の目線の違い」等であった。気づきの有無にかかわらず、事故予防行動ありは18名であった(表4)が、具体的な対策の記述のあったものは17名であった(表6)。その内容は「子どもの手の届くところに割れ物・危険物を置かない」「高く積み上げていた家具や物を低い位置に移動した」、「お風呂やベビーバスに水を溜めない」、「部屋の安全確認をした」、「風呂場、トイレ、ベランダに

表4 自宅の間取り図を描くことで気づいたことの有無と事故予防に関する行動の変化 n = 21

気づき	事故予防行動あり	事故予防行動なし	不明	合計
有	15	1	1	17
無	3	0	1	4
合計	18	1	2	21

表5 自宅の間取り図を描くことで気づいたこと n = 15

気づいたこと	件数
浴槽の水、洗濯機の水	4
ベランダの柵、クーラーの室外機	2
高く積んである家具や物	2
カセットデッキやコンセントの穴	2
台所やコンロの周り	2
危険な場所が多い	2
手に届く割れ物・危険な物	1
引き出し	1
つかまり立ちするテーブル	1
窓とソファの間	1
出窓	1
家の中の段差	1
ベランダに行くまで	1
対策を取っていない	1
子どもと大人の目線の違い	1
今まで気にしていなかった所にも目を配る	1

表6 事故予防の対策(行動と認識) n = 17

	カテゴリ	対策内容
行動	子どもの手の届かないところに割れ物・危険物を置かない	何でも触るので手の届くところに物(割れ物、危険)を置かない 赤ちゃんの目線で手が届く場所は、片づけるか、隠した 事故が起きないように、ガラス類、割れ物などは手の届かないところに置く
	高く積み上げている家具や物を低い位置に移動した	高いところで、落ちたら、危険な物は移動した 高く積み上げていた家具を低い位置に戻した
	お風呂やベビーバスのお水を溜めない	お風呂の水をすぐ捨てる よく、ベビーバスに水をためて置いていたが(洗濯水に使うため)、気をつけて溜めないようにする
	家の中の整理整頓	家の中の整頓 家の中の整頓
	引き出しやドアにストッパーをつけた	引き出しやドアにストッパーをつけた
	コンセントの穴を塞ぐ	コンセントの穴を塞ぐ
	風呂場、トイレ、ベランダに物を置かない	お風呂場、トイレ、ベランダなど注意して物を置かないようにした
	遊ぶ場所を一家所にまとめた	遊ぶ場所を一家所になるよう、おもちゃ、本を一つにまとめ、レイアウトした
	部屋の安全確認をした	もう一度部屋のなかの安全確認をしてみた
	認識	危険物が落ちていないか気をつける
つかまり立ちするテーブルに気をつける		つかまり立ちをする際にはテーブルには気をつける
誤飲しないよう、今まで以上に注意する		誤飲しないよう特に今まで以上に注意するようになった
危険な場所は子どもの行動に注意する		危険と感じる所は、(子どもの行動に)注意をするようになった
子どもの行動を把握する		子どもの行動をもっと把握するようになった

物を置かない」、「引き出しやドアにストッパーをつける」、「コンセントの穴を塞ぐ」、等の具体的な事故防止対策を実践していた。また、「子どもの行動を把握する」「誤飲しないように今まで以上に注意する」「危険な場所は子どもの行動に注意する」等の親自身が子どもの行動について認識を新たにすることが分かった。自宅の間取りを描き、さらに子どもの存在を認識させることで、家庭内の環境の再確認と子どもの目線に親自身の気づきがあった。子どもの行動にも意識が向けられていることが分かった。

3) 講習会後の事故の発生(表7, 表8)

講習会終了後から5ヶ月の期間に病院を受診する事故発生の有無をみると、事故のあった者は2名であった。1例目は1歳男児、親がお風呂場で水と間違えてお湯のみをだしてしまい、それが子どもの足にかかった。事故の対処方法ではすぐに流水で冷やすことを思い出し、冷やし続け、最低限のことはできたということであった。2例目は9ヶ月女児、実

家でハイハイをしていてミキサーのボタン押してしまっていたであり、具体的な事故の状況と対処方法はなかった。いずれも病院受診をしていた。後者の例は自宅以外での事故発生であった。

表7 事故発生の有無

		n = 21	
		有	無
人数		2名	19名

表8 事故発生状況

事例	事故の状況	対処	病院受診の有無
1歳男児	お風呂場で水と間違えてお湯を出してしまい、それが子どもの足にかかった、幸い大きなけがではなかった	直ぐに流水で流すことを思い出し、冷やし続け、最低限のことはできた	有
9ヵ月女児	実家で、這い這いしてミキサーのボタンをおした。けが	記載なし	有

※講習会后5ヵ月以内の事故発生

IV. 考察

乳幼児学級に参加した35世帯中、調査2で回答が得られたのは21世帯であった。21世帯の家族構成はすべて両親と子ども世帯の核家族であり、子どもの数が2人は2世帯にのみで、他19世帯は子どもの数は1人であった。対象者の9割は両親と子ども1人の家族構成であった。また子どもの年齢では1歳代が半数を示していた。1歳代は自立歩行の可能な時期であり、子どもの行動範囲が広がり、事故を起しやすい年齢にある。さらに、その親は子育てが初めであった。長村（2004年）は保健師の子どもの事故防止活動に対する意識調査において、事故防止指導に望ましい時期は8～10ヵ月、3～4ヵ月、1歳6ヵ月、3歳の順に回答が多く、保護者への指導時期として乳児期が重要であると報告している。今回の参加者の子どもの年齢を見ると1歳未満は6名で、2歳未満は14名であり、また9割は第1子を持つ保護者であったことから、講習会の指導時期としては適切な時期であったと考える。

乳幼児学級に参加した親を対象に講習会后に質問紙による、講習内容の評価を行った。講習会の目的の一つに「事故防止の再確認ができる」を取り上げた。そこで、参加者に自宅の間取りを描かせたことにより、自宅の環境の危険な場所の気づきや子どもと大人の見線の違い、今まで危険と気づかなかった所へ目を配るなど、自宅環境の危険な場所の発見と事故予防の再認識をしてい

た。このことは、講習会のゴールの一つである、事故予防の再確認ができるということが達成されたといえる。さらに、危険な場所に気づいて、具体的に事故予防策を実践しており、行動変容を起こした者が多かった。今回の講習会で、参加者に自宅の間取りを描かせた方法は、家庭内における危険な場所と事故予防を再認識し、事故予防対策の行動を起こすきっかけに繋がったことがわかった。自宅の間取りを描くことは、自宅の危険な個所を可視化し、事故予防の視点に気づけたと考える。また、子どもを描かせたことにより、子どもの行動に意識が向けられたことがわかった。自宅の間取りを描くことは事故予防策の方法として効果的であると言える。田中（2001年）は子どもの事故発生の場所は屋内で多く発生していると報告しており、そのことを考えると、家庭で実践可能なことから事故予防策を立てることが重要である。講習会参加の感想や講習会での参加者の様子から参加者同士がお互いに実際に起きた事故の体験について、情報を共有していた。年齢の小さい子どもを持つ親にとっては、既に体験している年長児の事故の内容や状況を聞くことで、今後、子どもの成長発達に伴って起こりうる事故を予測することや年齢に応じた事故の特徴にも気づくことができた。また、今回の講習会のゴールの一つに「心肺蘇生法の必要性が分かる」としたことで、参加者から心肺蘇生法の実技を体験したいとの希望があり、後日、追加講習会を設け、消防士による心肺蘇生法の実技講習につなげた。事故の予防と応急処置の方法、さらに、事故による重篤な場合を想定して心肺蘇生法の必要性を説明したことで、心肺蘇生法の実技に関心をもち、参加者らの動機づけになったと考える。

講習会後の事故発生は2件であった。そのうち1件は、熱傷であり、講習会での処置の方法を実践していたことが分かった。事故発生場所では1件は自宅であり、他1件は親の実家であった。子どもの事故は自宅だけでなく、自宅以外の子どもが日常生活を過ごす場においても発生する。子どもの養育に関わる者は事故防止の認識と応急処置の方法を知識とし身につける必要があるといえる。今回の参加者の対象の殆どが第一子をもつ親であり、子どもの成長と共に子育てを体験している状況にある。子どもは日々、成長しており、成長と共に行動範囲は広がり、生活空間も広がっていく。養育者にはそのような子どもの特徴を理解しながら、子どもにとっての安全な家庭環境を整備し、事故予防対策を立てていくことが求められる。不幸にも事故が発生した場合、応急処置や心肺蘇生法の実施が必要である。しかし体験が無いと技術は身につかないものである。そのためにも、講習会の機会を設け、教育、啓蒙活動を継続していくことが大切である。今回の調査の結果から、講習会後の事故予防対策の

実践が見られたことから、講習会の効果があったと考える。自宅の間取り図を描くことや、また写真を撮ることも自宅内を客観的に見ることができると考えられる。電子機器の発達している現在において、スマートフォンでの写真撮影は簡便であり、手軽に自宅内を撮影し、子どもの目線からの家庭内環境を見ていくツールとしても活用できると考える。

V. 結論

乳幼児を持つ親を対象に乳幼児の事故予防と応急処置の講習会を実践した。自宅の間取りを描くことにより、自宅の危険な場所に気づくことができ、事故予防対策の行動がみられた。自宅の間取り図を描くことは自宅内を客観的に観察することで、子どもの目線に気づき、事故予防対策の方法として効果があることが分かった。

おわりに

子どもの不慮の事故による死亡は死因のトップに位置している。少子化の現代、子どもを事故から守り、具体的に予防策を講じ、子どもにとって安全な環境づくりをまず、家庭から見直し実践していくことが重要である。また、今後、妊娠期から、出産後の子どもの成長、発達に伴う子どもの事故予防対策に意識を向けていくことは、親子ともに健康な生活を過ごしていくためにも必要であると考えられる。

引用・参考文献

- 厚生労働省ホームページ「平成30年人口動態調査」
<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai18/index.html>（閲覧日 2019年10月30日）
- 厚生労働省ホームページ「平成14年人口動態調査」
<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai02/toukei6.html>（閲覧日2019年10月30日）
- 田中哲朗：新 子どもの事故防止マニュアル 改訂第2版，診断と治療社，2001
- 平成9年度厚生省心身障害研究，小児の事故とその予防に関する研究
- 市川光太郎：子どもの事故の特徴，チャイルドヘルス，16 (2)，4-8，2003
- 沖縄県石川保健所：平成12年度母子保健強化推進特別事業 多面的な子どもの事故調査，51，平成13年3月
- 長村敏生，清澤伸幸，鄭 樹里 他：市町村における子

- どもの事故防止活動の効果的なあり方について，小児保健研究，63 (6)，685-691，2004
- 山中龍宏：日本小児科学会雑誌「傷害速報」と事故による障害予防の取り組み，小児看護36 (6)，748-754，2013
- 厚労省ホームページ「健やか親子21」
<http://sukoyaka21.jp/about>（閲覧日2019年10月31日）